

小学校英語教育における絵本の活用について

—絵本の選び方を中心に—

木原 美樹子

Criteria for Selecting Suitable Picture Books for Elementary School English Classes

Minako Kihara

(2017年11月22日受理)

1. はじめに

言語習得のスタートは、母語であれ外国語であれ、聞いて理解することである。絵本の読み聞かせにおいて、絵本の挿絵はテキストの内容理解の大きな助けとなる。母語としての日本語教育においても、外国語としての英語教育においても、絵本が有効であることは、すでに様々な文献で述べられている。(松居(2003); エリス & ブルースター(2008); リーパー(2011) 他) アレン玉井(2011)は、文脈の大切さについて「言葉は生きた文脈の中からしか育たない」として、ストーリー中心の英語の授業を提唱しているし、畑江(2012)は小学校から中学校への英語カリキュラムの円滑な接続として、英語を「読む」ことにつながる絵本の活用を提案している。本稿では、小学校の英語教育において、絵本の読み聞かせを行う際に、どのような絵本を選ぶべきかを中心に、絵本の活用について考察する。

2. 次期学習指導要領と絵本

2017(平成29)年3月公示の小学校学習指導要領により、小学校3・4年生で年間35単位時間の「外国語活動」が必修となり、小学校5・6年生では年間70単位時間の「外国語」が教科として導入されることとなった。3年生から外国語活動を始めるにあたり、教材として絵本が使用されることになっている。小学校において「外国語活動」は、2011(平成23)年度より小学校5・6年生で必修化されたが、今回導入される小学校3・4年生の「外国語活動」は、小学校5・6年生の「外国語活動」を、単に学年を下げて行うわけでは

ない。中学年の発達段階に合わせた実施が必要である。文部科学省は補助教材として3年生用英語絵本 *In the Autumn Forest* (教室用大型絵本・児童用小型絵本)、4年生用英語絵本 *Good Morning* (教室用大型絵本・児童用小型絵本) とそれらのデジタル教材 *Hi, friends! Story Books* を開発し、2016(平成28)年度から研究開発学校等で使用している。次期学習指導要領に基づく3年生用外国語活動教材の Lesson 9 の単元目標にも「絵本などの短い話を聞いて、おおよその内容がわかる」「絵本などの短い話を反応しながら聞くとともに、相手に伝わるように台詞をまねて言おうとする」とある。(『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』(以下『研修ガイドブック』)年間指導計画例 [案] 32-33)

英語絵本は、従来の共通教材にも見られる。2012(平成24)年度より、外国語活動で使用されている『*Hi, friends! 2*』の Unit 7 「We are good friends. オリジナルの物語を作ろう」でも、昔話絵本を題材としたコミュニケーション活動が設定されている。¹ その単元目標に、「まとまった英語の話を聞いて、内容がわかり、場面に合ったセリフを言う」が挙げられている。さらに絵本の読み聞かせについて、『*Hi, friends! 2 指導編*』の中で以下のように述べられている。

コミュニケーションは、「話す」ことというより、相手の話を「聞く」ことから始まる。聞いて相手の話していることがわかる体験をたくさん児童にさせることが大切である。そこで、児童に聞かせる工夫の1つとして、絵本の読み聞かせが考えられる。

絵本の絵から情報を読み取り、状況を理解しながら、児童は相手の話をきくことになるため「聞いてわか

別刷請求先：木原美樹子，中村学園大学教育学部，〒814-0198 福岡市城南区別府5-7-1

E-mail: kihara@nakamura-u.ac.jp

¹ 2008(平成20)年度に外国語活動の必修化が決まり、2009(平成21)年度から2011(平成23)年度までは、文部科学省から共通教材『英語ノート』が全国の小学校に配布されていた。『英語ノート』には6年生の単元に「オリジナルの劇を作ろう」がある。

る」体験をさせやすい。(『Hi, friends! 2 指導編』32)

同様のことが、次期学習指導要領に基づく『研修ガイドブック』「11 絵本の活用」(106-107)で、特に中学年の児童と絵本教材について述べられている。絵本を活用することによる効果としては、以下の3点が挙げられている。

- ・読み聞かせ活動では、児童が指導者の英語を聞き、絵の助けを借りて「英語を聞いて意味が分かる」体験をすることができる
- ・良質なまとまりのある英語をインプットできる
- ・絵本には同じ表現が繰り返し出てくるため自然に語彙や表現を身に付けやすい

さらに、絵本の選択に関しては、「指導する単元のねらいや題材、言語材料」に適したもの、「児童の発達の段階に応じた多様な使い方のできるもの」が挙げられており、後者の例として「ストーリーが簡潔で分かり易く、同じ表現が繰り返し使われている」「児童が日本語で読んだことのある」ものが提示されている。

絵本の読み聞かせは、事前に絵本で使われている語彙や表現を取り上げておく場合と、単元の導入部分で使用する場合が考えられる。「ストーリーが簡潔で分かり易い」ことは、児童に「英語を聞いて意味が分かる」経験をさせるのに有効である。「同じ表現が繰り返し使われていること」は言語学習において重要な要素である。絵本は繰り返し構造を持っているものが多い。新多・馬場(2016)は繰り返しの言語習得上の効果について挙げている。絵本の読み聞かせを繰り返すことが、子どもの言語発達を促すと述べており、それは絵本の中の繰り返し構造にも当てはまる。

文部科学省が開発した教材のひとつ、前掲の小学校3年生用の絵本 *In the Autumn Forest* は、秋の森における動物たちのかくれんぼが題材となっている。最初に登場する犬がオニで、犬は隠れた動物の体の一部を見つけて、その動物が何かを推測する。見つかった動物は見つかった体の部位を言って、自分を紹介する。ストーリーは簡潔で分かり易い。基本的に次のようなやりとりである。

I see something white. Are you a ...?
Oh, my ears! Yes, I am. I'm a rabbit.

以下、I see something ... Are you a ...? — Oh, my ...! Yes, I am. I'm a ... のパターンが繰り返される。something の後ろには、white, big, round 等の色・大きさ・形な

どを含む日常的な修飾語が使われている。挿絵で示されている状況から、英語の意味を推測できる。かくれんぼという、子どもにとって身近な場面を設定した上で、動物の名前、その動物に特徴的な体の部位が取り上げられている。英語の学習に加え、干支や昔話の要素も取り入れられている。どの動物が隠れているのか推測しながら読んでいくことができ、その中で英語表現を確認することができるという点で、単に絵カードを使って英単語を学習するのとは違い、児童の心に英語が残ると考えられる。*In the Autumn Forest* の効果的な活用法として、『研修ガイドブック』「11 絵本の活用」(106-107)では、3年生の新教材で「Unit 8 What's this?」の導入場面における読み聞かせを挙げている。この単元で、動物の名前を表す語彙が扱われているところが、*In the Autumn Forest* と共通している。初めての語彙でも、絵本の読み聞かせによって、その意味を推測することができる。

小学校4年生用に開発された絵本教材 *Good Morning* は、主人公がブラジルに住む友人に対して、朝起きてから寝るまでの自分の一日の生活を紹介するという設定である。英語で紹介しているが、日本語を使っている箇所があり、それらはローマ字で示されている。日本語で表記すると「いただきます。」「ごちそうさま。」「行ってきます。」「ただいま。」の4つである。後ろの2つ「行ってきます。」と“See you later.”、「ただいま。」と“I'm home.”が併記されているのは、日本語と「完全に同じ性格のものとはいいがたいため」(「中学年を対象とした絵本に関する基本的な考え方」: 17)である。「いただきます。」と「ごちそうさま。」には併記可能な英語もない。このようなことばの違いは、日本と外国の文化の違いを考えるきっかけにすることができる。この絵本にはサブストーリーも用意されていて、そちらに目を向けて児童とやり取りをしても楽しめる工夫がなされている。

3. どのような絵本を選ぶか

小学校の外国語の授業の中で、絵本をどのような目的で使用するかによって、選択する絵本も違ってくる。指導する単元と関連づけて使用する場合は「単元のねらいや題材、言語材料」に適したものを選択する。Oxford Reading Tree のKipper シリーズは、イギリスの幼稚園児や小学生を対象とした学習用の絵本であり、難易度が語彙、文、文法レベルでコントロールされている。裏表紙にはその本の語彙がリストされており、簡単に確認できる。レベル分けされているだけでなく、おもしろく読めるようストーリーにも挿絵にも仕掛けがある。例えば *What a Bad Dog!* では、フロッピー (Floppy) という犬は一見、やりたい放題に行動しているように見えるが、

よく見ると蝶を追いかけ、そのような行動をとっているのだということが分かる。場面の背景に目を向けると、家の中では、お父さんが、フロッピーの行動に驚いて気を取られ、本人は気づいていないが、マグカップに注ごうとしている牛乳をこぼしていたりもする。細かいところで、挿絵に遊び心がある。シリーズを通して、ごく普通のイギリス人家庭の暮らしが描かれていることは、異文化理解にもつながる。1冊ごとに起承転結があること、絵から場面の状況が分かりやすいため、英語表現と使用場面の理解が容易であること、同じようなパターンで英語表現が繰り返されること等、教材として考えて作られている。このような学習用に作られた絵本は、語彙や英語表現を定着させる目的で使うことできる。

長い年月を経て残ってきた絵本には、不思議と子どもを引きつける魅力がある。作品として評価の高い英語絵本は、小学校における読み聞かせに適した絵本であろうか。松本（2017）は小学校3・4年生の読み聞かせに使える絵本の選定条件（試案）として10項目を挙げており、そのうちの4項目、絵本の長さ、英語が平易であること、英語に特徴的な音声やリズムであること、絵本作品として優れていること、は必ず満たしてほしいと述べている（12-14）。小学校での英語絵本の使用において、英語が平易なものであることは必須で、子どもが音声を聞いてまねて繰り返し言える程度のレベルである必要があると思われる。子どもが思わず言ってみたくなる、口ずさんでしまう英語である。英語が平易なものであれば、1冊の分量もそれほど多くない。適度な分量で、1回で読み終わるものが扱いやすいが、数回に分けることも可能である。松本（2017）は4つめの選定条件、絵本作品として優れていることについて、コールデコット賞や国際アンデルセン賞などの受賞作品を挙げている。松本が例として挙げているのは、モーリス・センダック（Maurice Sendak）の『かいじゅうたちのいるところ』（*Where the Wild Things Are*）である。日本語で読んだことのある児童は多いと思われるが、英語で読み聞かせても、英語が分かったという気持ちにはつながりそうにない。この本の英語は決して平易ではない。以下、『かいじゅうたちのいるところ』の原作 *Where the Wild Things Are* で、マックスが「かいじゅうたちのいるところ」に到着した場面を挙げる。²

And when he came to the place where the wild things are / they roared their terrible roars and gnashed their terrible teeth / and rolled their terrible eyes and showed their terrible claws / till Max said "BE STILL!"

/ and tamed them with the magic trick / of staring into all their yellow eyes without blinking once / and they were frightened and called him the most wild thing of all / and made him king of all wild things.

もちろん児童が絵本の英語すべてを理解できなければならないわけではないが、絵本で使用されている英語の文構造や語彙の難易度には注意を払うべきである。英語について専門的な教育を受けていない読み手にとっても、その英文の構造が理解できないと、感情を込めた読み聞かせができない。文構造が単純である必要がある。例えば重文は何とかがついていけるとしても、複文は難しいと思われる。上記センダックの英語版からの抜粋は、8行に渡っているが1文であり、関係副詞や副詞節が使われている。「児童が日本語で読んだこと」があるからという理由だけでは、その絵本を使用する理由にはならない。日本語で読んだことがあって内容は知っていても、英語表現が難しければ、「英語を聞いて意味が分かる」という体験にはつながらない。センダックの『かいじゅうたちのいるところ』（じんぐうてるお訳）と同様、レオ・レオニの『スイミー』（谷川俊太郎訳）は小学校2年生の国語教材にも使用されていて、よく知られているが、これも原作の英語は簡単ではない。次は *Swimmy* の冒頭である。

A happy school of little fish lived in a corner of the sea somewhere. They were all red. Only one of them was as black as a mussel shell. He swam faster than his brothers and sisters. His name was Swimmy.

2年生の国語の授業で学習した児童にとって、内容は周知のものである。*Swimmy* の挿絵は、各見開きページのテキストからワンシーンを切り取ったものであり、挿絵とテキスト全体との対応関係が成り立っていない。小学校英語教育においては、挿絵だけでもおおよその内容が分かる、且つテキストでも分かる絵本を使う必要がある。優れた絵本であると評価されているものが、必ずしも小学校における読み聞かせで使用するのにふさわしいとは言えない。

子どもがよく知っているエリック・カールの『はらぺこあおむし』の原作、*The Very Hungry Caterpillar* は、*Swimmy* に比べて文構造やプロットが単純である。曜日やたくさんの食べ物が登場し、挿絵とテキストが対応しているため、英語が分かり易い。*The Very Hungry Caterpillar* では、あおむしが食べても食べてもお腹がべ

² スラッシュを付した箇所は、原文では改行されている。

こpecoであるというところに、繰り返し構造が見られる。先述の通り、絵本は繰り返し構造を持っているものが多く、それは言語学習に重要な要素である。繰り返し構造を持つ絵本の代表例として、同じエリック・カールの絵本 *Brown Bear, Brown Bear, What do You See?* がよく取り上げられる。Brown Bear, Brown Bear, What do you see? -- I see a red bird looking at me. のようなやり取りが、動物とその色が入れ替わるだけで繰り返される。エリック・カールの絵本には、英語を学び始めたばかりの子どもにも分かりやすい、動物や色を使った絵本がたくさんある。同じパターン of 英語表現を繰り返す中で、子どもたちは動物や色を絵で確認しながら、英語に慣れ親しむことができる。以下、市販されている英語絵本を取り上げながら、読み聞かせ絵本の選択について考察していく。

例えば Nick Sharratt の *Ketchup on Your Cornflakes?* は、Do you like ~? --- Yes, I do. / No, I don't. を学習したところで使用することができる。タイトルにもあるように、最初の文は Do you like ketchup on your cornflakes? である。普通は考えないケチャップとコーンフレークの組み合わせを取り上げて、好きかどうか尋ねている。絵本のページが文の前半 Do you like ~ と後半 on/in your ~? で上下を分けてページをめくることができる仕掛けで、文の前半と後半の様々な組み合わせが可能である。Do you like custard on your tooth brush? というのも可能である。左ページの英語と右ページの挿絵が対応しているため、意味は理解しやすい。意外な組み合わせを作ることができ、楽しめる絵本になっている。Do you like ketchup on your chips? という常識的な組み合わせももちろんある。

日常的な語彙に単純な文構造で、挿絵とテキストが対応している絵本に、Eric Hill の *Where's Spot?* がある。子犬スポット (Spot) の姿が見えず、母犬がスポットを探して回る仕掛け絵本である。各場所で母犬が Is he behind the door? 等と問いかけたところで、仕掛けをめくって確認するようになっている。スポットではなく他の動物がおり、ドアの後ろにはクマ、時計の中にはへび、ピアノの中にはカバ、階段の下にはライオンがいる。さらに、クローゼットの中には猿、ベッドの下にはワニ、箱の中にはペンギン、絨毯の下には亀がいて、スポットはなかなか見つからないが、最後にバスケットの中にいるスポットを見つける。以上のように、家の中にあるものを表す英単語、動物名と “Where's ~?” や “Is he + 場所?” の文型、場所を表す前置詞 behind, inside, in, under が使われている。日常的な語彙に、同じパターン of 文の繰り返しで、Brown Bear の絵本と同様、ほとんど英語の予備知識がない児童相手にも読み

聞かせができると思われる。

単純に英語の音・リズムが楽しい絵本を読み聞かせることも、英語の音声に慣れ親しむ意味で有効であると思われる。例えば、Joy Cowley の *Mrs. Wishy-Washy* は、ストーリーも分かりやすく、英語の音を楽しめる作品である。絵本の表紙にもある Wishy-Washy おばさんは、非常にたくましい姿で描かれている。それとは対照的に “wishy-washy” という英語は本来、 “feeble or insipid in quality or character; lacking strength or boldness” (*The New Oxford American Dictionary*, 2nd Edition) であり、弱々しさを意味する表現である。絵本の中で、牛、豚、あひるはそれぞれ “Oh, lovely mud.” と自らぬかるみに入って泥だらけになる。泥んこの動物たちを見た Wishy-Washy おばさんは、絵本に描かれている外見通り、全く弱々しいおばさんではない。動物たちに “Just LOOK at you!” と叫び、 “In the tub you go.” と、たらいに入るよう命じる。おばさんが動物たちを洗う場面は以下のように表現されている。

In went the cow, wishy-washy, wishy-washy.

In went the pig, wishy-washy, wishy-washy.

In went the duck, wishy-washy, wishy-washy.

調子のよい繰り返しがおもしろい。「洗う」(wash) という動詞は使われていないが、日本語の「ごしごし」とも似た音 wishy-washy の繰り返しで、Wishy-Washy おばさんが、動物たちをごしごし洗っている場面が目につくようである。動物たちは抵抗もできず、おばさんに洗われるがままである。洗い終わると “That's better.” (ましになったわ。) と家に戻っていく Wishy-Washy おばさん、とそれを見送る動物たちだが、ストーリーはそれでは終わらない。動物たちはうれしそうにどこかへ行ってしまう。ページをめくると、読者の予想通り、最終ページでは、動物たちが再び “Oh, lovely mud.” (泥はいいね。) と泥んこになっている。人間の子どもの思わせるような動物たちである。

押韻が特徴的な Eve Sutton の *My Cat Likes to Hide in Boxes* は、自分の猫といろいろな国の猫の好きなことが違ってその対比がおもしろい。冒頭の英文は以下のようにになっている。

My cat likes to hide in boxes.

The cat from France

liked to sing and dance.

But MY cat likes to hide in boxes.

The cat from Spain

flew an aeroplane.

The cat from France
liked to sing and dance.

自分の猫と外国の猫が好きなのが交互に出てくる。自分の猫は箱の中に隠れるのが好きであるが、外国の猫はそれぞれ好きなことが違い、対照的に述べられている。いろいろな国の猫がその国に特徴的な服を着ており、文化の違いにも触れることができるであろう。それぞれの国の猫が好きなことを表す文は、次のように韻を踏んでいる。France と dance, Spain と aeroplane, Norway と doorway, Greece と police, Brazil と chill, Berlin と violin, Japan と fan である。しかし、その韻をおもしろいと感じるには、英語母語話者が持っているような韻に対する感覚が必要である。児童がそれを理解しておもしろいと感じるのは難しいのではないと思われる。

Nick Sharratt の *Shark in the Park!* は英語の韻が絶妙である。文構造が単純であり、挿絵とテキストが対応していて、ストーリーが理解し易い。タイトル同様、本文も boy と toy, Pope と telescope, surprise と cries, shark と park が韻を踏んでいる。そしてこの部分の英語は3回繰り返される。サメの背びれと思ったら、実は黒猫の耳だったり、カラスの羽だったり、少年の父親のリーゼント頭の毛先だったりする。最後に父親がもう帰る時間だと少年を呼びに来る。父親と一緒に家に帰りながら、少年は「今どき公園にサメはいないと言って間違いないね。」(“It’s safe to say there are no sharks in the park today!”) と笑顔で言う。しかし、その背景に見える公園の池の中には、サメの背びれらしきものが見えている。予測を裏切るオチである。

軽快で単純なリズムがあり、ストーリーに予測性がある絵本に、Michael Rosen 再話の *We’re Going on a Bear Hunt* がある。表紙を見ると、とてもクマがりに行く人たちではないし、クマがりに行く格好でもない。どう見ても散歩である。この絵本ではタイトルと同じ文を含む4行の英文が4ページごとに繰り返される。

We’re going on a bear hunt.
We’re going to catch a big one.
What a beautiful day!
We’re not scared.

クマがりに行く途中で何度も障害物にぶつかる。障害物とは、草や川、ぬかるみ等で、英文のパターンは同じで障害物だけが入れ替わる。下の例では、Grass! Long

wavy grass. の部分が、次の場面では A river! A deep cold river. となるだけで、Uh-uh! と3行目以下は繰り返してある。

Uh-uh! Grass!
Long wavy grass.
We can’t go over it.
We can’t go under it.
Oh, no!
We’ve got to go through it!

この本に特徴的なことは、オノマトペの使用である。オノマトペは、音や様態を感覚的に表現することばであり、Swishy swashy!, Splash splosh!, Squelch squerch!, Stumble trip!, Hoooo woool!, Tiptoe!, が、クマのいる洞窟に行くまでと洞窟から家に帰るまで、往復で各3回ずつ繰り返される。swishy は形容詞で「シュッシュッ [サラサラ] と音を立てる」、splash や splosh は「ザブン [ドボン、バシャン] という音」、squelch は「ピチャピチャ [ビシャビシャ] (いう音)」、stumble や trip は「よろけ [つまずき] ながら歩く」様子を表し、hoo は風などの音を表すことばで、tiptoe は「忍び足で歩く」様子を表すことばである(『ジーニアス英和大辞典』第3版を参考)。英語は日本語に比べるとオノマトペの数が少ないが、英語にあるオノマトペに多少アレンジを加えながら、場面の様子をうまく表している。³ 最後は予測通り、大きなクマを捕まえることなどできず、「ぼくらはもう、クマがりなんかに出かけない。」(We’re not going on a bear hunt again.) となる。絵本のストーリーは、アメリカの民謡に基づくものである。インターネット上で、民謡の再話を行ったローゼン本人による、絵本の語りの素晴らしいパフォーマンスが公開されている。その演技から分かるように、この絵本には演劇的要素があり、挿絵とテキストと読み手のジェスチャーによって、さらに立体的に物語を演出することができる。

Jules Feiffer の *Bark, George!* も、魅力的な挿絵とテキストが対応し、ストーリーが分かりやすい絵本である。犬らしい鳴き方をしない子犬のジョージに困り果て、母犬がジョージを獣医に連れて行く。獣医の診察により、ジョージが変な鳴き方をしていた理由が分かる。ジョージに飲み込まれた動物が発していた鳴き声だったのである。次々にジョージの中から動物が取り除かれ、最後には子犬らしく“arf”と鳴けるようになる。母犬は大喜びする。しかし帰り道、母犬から吠えてみな

³ 日本語版の山口文生訳では、日本語の一般的なオノマトペを使い「カサカサカサ!」「チャブチャブチャブ!」「ペタペタペタ」等と表現されている。

さいと言われたジョージが発したのは、arfではなかった。絵本の中の英語の文構造は単純で、使われている動詞は bark, go, went, took ... to, get to, pull out, reached, kissed, wanted to, show off であり、bark, go, went が繰り返し使われている。挿絵と合わせて読み手のジェスチャーの工夫があれば、状況は理解しやすいと思われる。動物の名前 dogs, cats, ducks, pigs, cow と鳴き声 arf, meow, quack-quack, oink, moo は内容理解のポイントとなる。職業 vet, 形容詞 thrilled, deep など使われている。thrilled については、very happy などの表現を加えることで児童にも理解させることができる。読む前に、日本語と英語の動物の鳴き声を表す表現の違いについて確認しておく、理解しやすいと思われる。見開きの右側のページを、左側のページと同時に見せずに隠しておいて、次の展開を予測させる工夫も必要である。吉村他（2017）は、5年生に行った15冊の絵本の読み聞かせ実践の中で、児童の反応がよかった絵本としてこの *Bark, George!* を挙げている。ストーリーの意外性もあり、高学年の児童が読み聞かせに引きつけられたという。

吉村他（2017）は、2つの小学校で半年間に渡る読み聞かせを行っている。5年生対象の事後アンケートの結果として、A小学校で英語絵本への興味が下がったことが報告されている。要因として選定した絵本の偏り（動物を扱った絵本ばかり）や5年生の発達段階との不一致、つまり教材が幼すぎたことが挙げられ、高学年では知的好奇心を満たす内容の絵本選定が大切だと述べられている。エリック・カールの *From Head to Toe* は、高学年向きではないということであった。高学年では知的好奇心を満たす内容である必要があるが、実際にまだ子どもたちの英語力は低いことから、絵本の選択が難しいということも指摘されている。しかし、同じ絵本の読み聞かせでも、学校によって児童の反応が異なるものであったことが報告されている。B小学校で同じ5年生対象のアンケートから、外国語や英語絵本への興味が高まったという成果が得られたという。同調査では半年間にA小学校では7回、B小学校では4回、5年生各1クラスに対する英語読み聞かせを行っている。B小学校では、以前から朝の時間に全校各クラスで日本語の絵本の読み聞かせを行っており、その時間を利用しての、英語絵本の読み聞かせであったということである。児童や学校に応じた指導が必要であることを示している。絵本の適切な選定以外にも、児童の反応を見ながら、児童の状態に合わせて臨機応変に読み聞かせを行うことが必要であり、児童や学校の環境によっても、絵本読み聞かせの効果が変わってくるということである。

小学校5・6年生に対して、読み聞かせを行う場合

は、小学校3・4年生とは違う配慮が必要である。三宅他（2011）は小学校5・6年生の読み聞かせの実践に基づき絵本選定について論じている。Matulka（1997）の7つの絵本カテゴリー分類に基づき「Picture storybooks: 絵とテキストに強く関連性がある絵本類」を読み聞かせ実践用に選択している。そして、小学校高学年の精神年齢と教師の英語朗読の負担を考え、Oxford Reading Tree シリーズの中で、英語母語話者の5～7歳を対象にした Stage 4 から Stage 9 の12冊を選択したと述べている。実践後、児童には「この絵本が好きですか。」「この絵本のストーリーが理解できましたか。」「この絵本の読み聞かせの時、楽しかったですか。」という3点について質問している。内容理解については、Stage 7, 8, 9の絵本に関して、理解度が低く、読み聞かせも楽しくなかったという回答割合が高くなっている。読み聞かせとしては失敗である。絵本の英語のレベルが高すぎたのである。三宅他（2011）の研究の目的は、小学校高学年児童に適した絵本を探ることであり、読み聞かせを成功させることではなかった。三宅他は小学校高学年の読み聞かせに使用する絵本の選定に関して「総語数は約490語以内、異語数は約155語以内、1冊の文数は90文以内、1ページ内文数は約3文以内、1文内での語数は約6語以内」という指数を挙げている。そしてすべての数値が合致する必要はなく、内容面も考えて総合的に判断すべきであると結論づけている。読み聞かせそのものは失敗であったのだが、その原因は教材の選択にある。ある意味で小学校英語教育教材の条件をできるだけ満たすようなものを多くの絵本から探すより、その条件を満たすような絵本を作る方が合理的であるように思える。しかし、すぐれた絵本作品には、簡条書きの条件を越えた文学的の魅力があり、子どもたちを惹きつける力がある。以下、幾つかのすぐれた絵本を例に、この事について考察してみたい。

子どもたちに英語に触れる楽しさを伝えたい場合、英語のレベルは無理せずに、単純な文構造で、リズムが軽快で、音声をまねして言える、言いたくなるような絵本を選ぶ必要がある。教材用に作られた絵本と違い、本物の絵本は、単純な文構造のテキストでも内容に広がりがある。Simms Taback の *Joseph Had a Little Overcoat* は単純な文構造で繰り返しがあがりながら、子どもたちに物事を深く考えさせることができる絵本である。この絵本はユダヤ人の民謡を元に書かれている。ジョセフ（Joseph）はコートが古くなったので、その生地を使ってジャケットを作った。その後、ジャケットも古くなったので、今度はベストを作り、古くなるたびにスカーフ、ネクタイ、ハンカチ、と小さいものに変えていく。小さなボタン一つになってしまったところ、そのボ

タンをなくしてしまう。何もなくなってしまうジョセフだが、最後はこれまでのことを書いて本にする。「いつでも何も無いところから何かを作り出すことができるということだ」(Which shows ... you can always make something out of nothing), ということばで締めくくられている。最初の見開きページの文を次に挙げる。テキストは下線部が変わるだけで、2行単位で繰り返される。2文目のIt wasは次からIt gotとなる。(下線筆者)

Joseph had a little overcoat. It was old and worn.
So he made a jacket out of it and went to the fair.

次の見開きページは、以下の通りである。

Joseph had a little jacket. It got old and worn.
So he made a vest out of it and danced at his nephew's wedding.

このパターンの繰り返しである。古いものから新しいものを作る。それを身につけて、何をすることが違っているだけである。何から何が作られたかは、挿絵ではっきり示されている。それを身につけて何をしたのかについても挿絵で示されている。挿絵とテキストが対応しているので、分かりやすい。コートが古くなり、コートからジャケットを作り、だんだんと小さなものになっていく中で、ジョセフも年をとっていく。最後には1つのボタンとなり、それもなくなってしまう過程は、ジョセフの人生とも重なる。ジョセフのコートとジョセフの人生、最後にはいったい何が残るのかという深みのある物語となっている。テキストはそれほど難しいものではないが、小学校高学年、いやそれ以上の知的レベルに答える本である。⁴

ジョセフの絵本は児童の文学的興味から児童を惹きつける絵本であったが、児童の科学的興味から児童を惹きつける絵本として、Alan Bakerの*White Rabbit Color Book*がある。単なる色でなく混色の知識も扱っている。白いウサギがいくつかの色のペンキが入ったバケツに入って、いろいろな色のウサギになる。色が別の色と混ざると何色になるかを考えさせることができ、色の持つイメージも取り上げることができる絵本である。色について取り上げたいとき、一歩進んだ内容であり、高学年の児童にも対応できると思われる。

Brown Bear, Brown Bear, What do You See? と *The Very*

Hungry Caterpillar の2冊の絵本は、一般に高学年の知的レベルには対応していないと考えられているが、6年生に対して授業を行った実践報告が、又野(2013; 2014)にあり、子どもたちの反応が極めてよかったことが報告されている。絵本によって低学年向き、高学年向きといったことはあるが、読み聞かせの仕方、読み聞かせ前の活動、読み聞かせ後の発展のさせ方によっても変わってくるようである。日本語絵本の読み聞かせについてではあるが、大豆生田(2017)は、『きんぎょがにげた』という絵本の読み聞かせについて述べている。この絵本は、逃げた金魚が隠れている場所を探しながら、読み進めていく本である。「次はどこにいるのかな」に対して「ここ」というような「読む側と読んでもらう側の相互のやりとり」が「幸せの時間」を生み出しているという。赤ちゃんから大学生まで「やりとり」を楽しめる最高の絵本として紹介されている。英語の絵本についても、読み手が好きな絵本であることは重要であると考えられる。

4. むすび

英語絵本は、英語のおもしろさを味わう上で、是非活用したい教材である。英語を使われる文脈、場面ととらえることができる。英語という言葉だけでなく、その背景にある文化についても学ぶことができる。リーパー(2011)は、アメリカで移民の英語教育に長年取り組んで来た経験から、ガイドド・リーディング(Guided Reading)について紹介している。ガイドド・リーディングとは「英語が読めない子どもたちを「読めるように導いていく」リーディングの指導法」(14)である。リーパー(2011)は、英語にはリズムがとても大切であり、それはあいさつやゲームだけでは身につかない、絵本には、他の教材にはない大きな力、子どもの心に入りこむ力があると述べている。

小学校で読み聞かせに使用する絵本は、単純な文構造で同じパターンの文が繰り返し使われているものが望ましい。挿絵とテキストがしっかり対応し、挿絵が内容理解の助けとなるものである必要がある。リズムがおもしろく、児童が音声をまねて言える、言いたくなるようなものを選ぶことが大切である。それに読み手がジェスチャーを加えることで、さらに児童の理解度が高まり、「英語が分かった」という体験につながっていく。児童だけでなく、読み手にとっておもしろい絵本であること

⁴ 同様の内容の絵本にPhoebe Gilmanの*Something from Nothing*がある。どんどん作り替えていくのはジョセフではなく、おじいさんであり、お母さんも登場するストーリーになっている。会話体でテキストが多く、挿絵はテキストの一部しか表していないため、上記の絵本に比べると分かりにくい。

も大切である。それは読み聞かせにおける、読み手と児童とのやりとりにも影響する。児童に読み聞かせる絵本を選択するにあたって、あるものは低学年向き、またあるものは高学年向きということは言えるが、児童の知的レベルに最適させることを目的に教材用として作成された絵本は、どこまでも掘り下げられる内容的深みをもたなければ、知的満足を与えることができない。言葉の表現が単純であっても、すぐれた絵本は子どもから大人まで考えさせる力がある。

参考文献

- アレン玉井光江 (2011) 『ストーリーと活動を中心とした小学校英語』 小学館集英社プロダクション
- エリス, G.・J. ブルースター (2008) 『先生, 英語のお話を聞かせて!』 松香洋子監訳, 玉川大学出版部
- 新多了・馬場今日子 (2016) 「SLA (第2言語習得研究) から見た必要な「練習」とは一くりかえしによせて」『英語教育』9月号, 12-13.
- 畑江美佳 (2012) 「小学校外国語活動における「読む」ことへの第一歩としての絵本の活用」『融合文化研究』第18号, 2-13.
- 又野陽子 (2013) 「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における英語の絵本の活用方法—絵本 *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* を教材として—」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.43, 41-50.
- 又野陽子 (2014) 「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における英語の絵本の活用方法—絵本 *The Very Hungry Caterpillar* を教材として—」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.44, 81-90.
- Matulka, D. I. (1997) *Picture this: Picture Books for Young Adults*. Westport: Greenwood Publication
- 松居直 (2003) 『絵本のよろこび』 日本放送出版協会
- 松本由美 (2017) 「小学校英語教育における教材用英語絵本選定基準の試案—絵本リスト作成に向けて—」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』第10号, 7-15.
- 三宅美鈴・竹本敬子・竹田直美 (2011) 「「読み聞かせ」絵本選定に関する実証的研究—小学校5・6年生の読み聞かせに適した絵本とは」『JASTEC 研究紀要』第30号, 1-17.
- 吉村美幸・吉田朋世・今井信義・福島安希子 (2017) 「小学校における英語絵本の読み聞かせの研究」『福井県教育研究所研究紀要』第122号, 122-133.
- リーパーすみ子 (2011) 『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』 径書房
- ローゼン, マイケル (1991) 『きょうは みんなで クマがりだ』 山口文生訳 評論社

参考資料

- 大豆生田啓友 (2017) 「絵本で伝わる保育・子育てのエッセンス55」『日本教育新聞』9月4日.
- 文部科学省 (2011) 『Hi, friends! 2 指導編』 東京書籍.
- 文部科学省 (2016) 「Hi, friends! Story Books」 デジタル教材.
- 文部科学省 (2017) 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 文部科学省 HP.
- Tims, Anna. "How we made: Helen Oxenbury and Michael Rosen on We're Going on a Bear Hunt," *The Guardian*. Guardian News and Media, 5 Nov. 2012, www.theguardian.com/books/2012/nov/05/how-we-made-bear-hunt.
<https://www.youtube.com/watch?v=OgyI6ykDwds> 「マイケル・ローゼンによる絵本の語り」 (閲覧日: 2017年9月23日)

本文中に取り上げた英語絵本

- Baker, Alan (1995) *White Rabbit Color Book*, New York: Kingfisher Books LTD.
- Carle, Eric (2007) *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*, Anniversary Edition, London: Puffin Books.
- Carle, Eric (1999) *From Head to Toe*, New York: Harper Collins.
- Carle, Eric (1994) *The Very Hungry Caterpillar*, New York: Philomel books.
- Cowley, Joy (1997) *Mrs. Wishy-Washy*, Chicago: McGraw-Hill.
- Feiffer, Jules (1999) *Bark, George!*, New York: Harper Collins.
- Gilman, Phoebe (1993) *Something from Nothing*, New York: Scholastic Press.
- Hill, Eric (2003) *Where's Spot?*, Reissued, London: Puffin Books.
- Hunt, Roderick Hunt & Alex Brychta (2011) *What a Bad Dog!* Oxford: Oxford University Press.
- Lionni, Leo (2017) *Swimmy*, Reissue Edition, New York: Dragonfly Books.
- Rosen, Michael (1995) *We're Going on a Bear Hunt*, London: Candlewick.
- Sendak, Maurice (2013) *Where the Wild Things Are*, London: Red Fox.
- Sharratt, Nick (1994) *Ketchup on Your Corn Flakes?*, London: Scholastic Children's Books.
- Sharratt, Nick (2000) *Shark in the Park*, London: Picture Corgi.
- Sutton, Eve (2010) *My Cat Likes to Hide in Boxes*, London: Puffin Books.
- Taback, Simms (1999) *Joseph had a Little Overcoat*, New York: Viking.